

『指輪』

作…ポチ子

海辺を歩く男女

綾子 「さむーい！」

晴斗 「そりゃ冬だからな。」

綾子 「海風が体に沁みますねえ、晴斗さん。」

晴斗 「なんだよ、その気持ち悪い言い方。さみい・・・わざわざ
ざこんなクソ寒い時に散歩しなくてもいいだろ。」

綾子 「だめだよ、今日じゃなきゃ。もう来れなくなっちゃうん
だから。」

晴斗 「・・・ホントに良かったのかよ。」

綾子 「ん？」

晴斗 「最後が、こんな場所で散歩なんて。」

綾子 「ふふ、なに？悲しくなってきた？」

晴斗 「なわけねーだろ・・・ただ、明日から海外ってのに、最
後の最後にこーんな何もないところで呑気に歩くだけでい
いのかって思っただけ。」

綾子 「何もなくていいじゃん。」

晴斗 「は？」

綾子 「海あるし。」

晴斗、呆れたようにため息をつく。

綾子、晴斗の方を振り返る。

綾子 「それに、晴斗もいるでしょ？」

晴斗 「・・・それを何も無いっていうんだよ。」

綾子 「そう？・・・最後にどうしても来たかったんだー、海。

本当はね、お母さんに明日早いから、家にいなさいって
言われてたんだけど、抜け出してきた。ちやった。」

晴斗 「怒鳴られても知らねーぞ。お前の母ちゃん、怖いし。」

綾子 「大丈夫、大丈夫。いざとなったら晴斗に無理やり連れだ

されたっていうから。」

晴斗 「おまつ、そのために俺呼んだのか。」

綾子 「ふふ、バレた？」

晴斗 「はぁ・・・帰るぞ。」

綾子 「え！？嫌だよ、まだ来たばっかじゃん。」

晴斗 「俺はお前の母ちゃんに怒られたくねーの。罪被せようと
しやがって。」

綾子 「うそうそ、さっきのは冗談だから。出かけたことバレて

も、晴斗のせいにはしない。」

晴斗 「ほんとかよ。」

綾子 「ほんと。」

晴斗 「・・・ったく。」

綾子 「そんなにうちのお母さん怖い？」

晴斗 「こえーよ。他人の子供にマジのげんこつしてくる母親な
んかいねえ。」

綾子 「あー・・・2人で門限破って遊んだときね。」

晴斗 「まじで死ぬかと思ったんだぞ、あの時。」

綾子 「そういえば、あの時もここで遊んでたんだっけ。」

晴斗 「・・・おう。」

綾子 「ねえ、晴斗。」

晴斗 「なんだよ。」

綾子 「はい、手出して！」

晴斗 「は？」

綾子 「いいから、出して！」

綾子、晴斗の手を引っ張って、手に何かを握らせる。

晴斗 「なんだよ、引っ張んなよ。・・・何、これ。」

綾子 「指輪。」

晴斗 「見りゃ分かるけど。」

綾子 「プレゼント、晴斗にあげる。」

晴斗 「は？なんで。」

綾子 「別に良いでしょ、何となくあげたい気分だったの。今日
でお別れだし。・・・大切にしてくね、それ。」

晴斗 「・・・一応、する。」

綾子 「一応って何よ。ちゃんと大切にしてくね。」

晴斗 「分かった分かった。すりゃいいんだろ。」

綾子 「もう・・・ほんとにほんとうに大切にしてくね・・・じ
ゃあね、晴斗。今までありがとう。」

晴斗 「おう。」

綾子 「最後に会えてよかった。」

晴斗 「・・・別に最後じゃないだろ。」

綾子 「え？」

晴斗 「たまには連絡しろよ、手紙でもメールでも色々あんだろ。
死ぬわけじゃないんだし。」

綾子 「・・・ふふ。」

晴斗 「なんだよ。」

綾子 「ふふ、なんでもない。」